

# 深イ〜話!

No.92

—— “致知 11月号、の中から「人生を照らす言葉」より（鈴木秀子） ——

人生においては大なり小なり、「どうしてこんな酷い目に遭わなければならないのか.....」  
と嘆きたくなるような辛いことを体験するものです。

しかし時間を経て冷静に振り返ってみると、

「あの出来事があったからこそ、いまの自分がある。

あの辛い体験は本当は恵みであった」と納得できることが多いものです。

(中略)

私の主宰する勉強会に参加されたある母親の話を思い出します。

彼女のお子さんは、この夏に開催されたリオオリンピックで金メダルを取る可能性もあった優秀な運動選手でした。幼い頃から才能を発揮し、さらに学業も優秀で性格も素直な、非の打ち所がない理想的な子でした。

母親はその子に常々、

「あなたは特別な才能に恵まれているのだから、その分多くを社会にお返ししなければなりません。スポーツも勉強も一所懸命にやって、オリンピックで金メダルを取れるよう頑張りなさい」と言い聞かせ、叱咤激励していました。

誰もがその子の活躍を信じて疑いませんでした。

ところが本人は16歳の時、オリンピックの代表選考会前日に、ビルの屋上から飛び降りて自ら命を絶ったのです。

涙に明け暮れていた母親に、ようやく立ち直りの兆しが見えたのは三年目くらいでした。

縁あって私の勉強会に参加し、身の回りに起こることにはすべて意味があることと学んだ彼女は、我が子の死には、どういう意味があるのかを考え始めました。そして、自分が幸せでいつも笑顔いっぱいであることこそが、亡くなった我が子への一番の供養になると気づいたのです。

以来、彼女は、「ほら見て、お母さんはこんなに幸せなのよ」と心の中で我が子に語り掛けるようになるとともに、自分の小さな殻を破り、人様のために何かできることはないだろうか、と思いを巡らせ、ささやかな実践を重ねるようになったのです。

「もし我が子が生きていれば、いま頃テレビでもてはやされていたかもしれません。けれども、それとは比較にならないほど、深い喜びと心の静謐を我が子は与えてくれました。」とおっしゃったのです。その言葉に、人間にはどんな辛いことも乗り越える力が備わっていることを改めて教えられ、私は深い感動を覚えました。

愛する我が子を失った親の悲しみというものは、一生癒えることはないかもしれませんが、けれども、同時に、我が子が死をとおして与えてくれるかけがえのない贈り物もあるのです。

